会員メッセージ

北の縄文道民会議　会員　瀬野　輝光

～日本の DNA？？？～

十五年ほど前のことですが、日本の歴史と文化の根っこを理解するために、最適な書物は何かと友人にたずねたところ、古事記を勧められました。

当時は、今ほどの古事記ブームではありませんでしたから、テキストは難解な岩波文庫です。出来の悪い頭で、うんうんと唸りながら、一～二年ほど繰り返して読むうちに、なんとなくわかったような気がしてきました。

古事記の世界に魅せられた私は、神話の伝承地をめぐる旅に出ます。最初に訪れたのは、イザナギとイザナミが初めて国生みしたオノゴロ島の比定地です。本州各地の神話の伝承地を訪ねるときは、心が躍るほど興奮しました。まるで、日本の原点を探しているような錯覚を覚えたからです。

古事記に登場する宮（みや）、京（みやこ）、陵（みささぎ）、古墳などを訪ね歩きました。私は自動車の運転ができないので、移動はすべて公共交通機関です。古代の遺跡は、概して不便な場所にあることが多く、炎天下の河内地方で脱水症状を恐れながら、夢中で歩き回ったりした思い出があります。

そのうちにふと、神話の創造された時代そのものに興味を抱くようになりました。

遺跡を訪ねる旅は、古墳時代から弥生時代へとさかのぼり、気がつけば縄文時代となっていました。３月には鹿児島県の縄文遺跡を訪ねる団体旅行に参加して、古代人の生活も火山の影響を強く受けていたことや、竪穴住居の出土しない遺跡などがあることを知り、驚きを新たにしたところです。

古代縄文人は、自然や季節にうまく適応できた森の民であったということをしばしば聞くことがあります。また、天文観測も行っていたらしく、日月の出入りの目印とした山は、他の山と区別する必要があったことでしょう。

現代人の私達も、森と山に心惹かれる方はとても多くいらっしゃいます。

一縄文ファンの私は、縄文人の暮らした森は、鎮守の杜として私達の暮らしの身近に残され、縄文人のメルクマールとした山は霊峰として大切に守られてきた、と勝手に想像しています。

縄文時代こそが日本人の DNA の育まれた時代だと思いながら、これからも歴史をさがす旅を続けていきます。

H28 年７月６日～10日開催「縄文夏まつり」

編集後記

○　もう春ですね。「北の縄文」春号の時期ですね。

私は、これまで、秋号・冬号と編集に携わらせていただきましたが、この度、私事ですが、編集から離れることとなりました。至らない点も多々あったかと思いますが、編集長をはじめ、会員の皆様のご支援を受けて、無事に発行できたこと、とても嬉しく思います。

これからは、縄文遺跡群の世界遺産登録を切に願い、陰ながら、道民会議の一会員として本会報を愛読したいと思っております。

会員の皆様、引き続き、ご愛読のほど、よろしくお願いいたします。（O．K）

○　会員の皆様、こんにちは。この度、「北の縄文」春号を発行しました。お忙しい中にもかかわらず、ご寄稿などでご協力をいただいた皆様に心からお礼を申し上げます。

いよいよ、北海道は日増しに“春のおとずれ”を実感する季節を迎えました。札幌は間もなく「スプリングエフェメラル」と言われる一年のうちで最も魅力的な季節を迎えます。長い冬から解放された縄文の人たちも、私たちと同様に躍動感に満ち溢れたのでは、と思いを巡らせています。

本年２月に開催した「縄文雪まつり」は多くの来場者で大賑わいでした。今までになく外国人観光客の来場者が多く、“北の縄文”を世界に発信する絶好の機会になったのではないかと思います。

平成２９年度も北の縄文道民会議は、「私たちの力で北の縄文遺跡を世界遺産へ！」の実現を目指し、縄文文化の発信を行って参りますので、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。（T．H）

編集・発行：北海道・北東北の縄文遺跡群の登録をめざす道民会議
編集長　谷　紘道　　編集委員　岡田　和英、村上　志保子、井上　香織
ＴＥＬ　011-221-1122
ＦＡＸ　011-221-0117
http://www.jomon-do.org/
E-mail　ebisutani@cbt.chuo-bus.co.jp

北の縄文道民会議
Hokkaido Jomon Culture Promotion Council

HOKKAIDO　JOMON　CLUB NEWSLETTER

北の縄文

春 2017

VOL.3

平成２９年４月発行

目次

■北の縄文コラム・・・・・・・・・・・・・・・・1
■縄文人よ～言霊の一しずく～・・・・・・・・・2～3
■よもやまばなし/構成資産から/道内各地の活動・・4
■縄文イベント情報/会員メッセージ・・・・・・・5～6

北の縄文コラム

「春のおとずれ」

北の縄文道民会議の会報「北の縄文」は昨年 12 月に産声を上げてから、もう三号となり、季節は春を迎えようとしております。

思えば、縄文時代にも四季があり、縄文人もこの頃になると長い冬に飽き、ようやく訪れた春に心躍らせていたことでしょう。縄文人が地面を掘り下げた竪穴住居と呼ばれる住まいで暮らしていた事は良く知られています。むかし聞いた説では、竪穴住居は寒さ厳しい冬の住まいで、夏になるともっと簡易な家を猟に適した場所に建てて暮らしていたそうです。確かに、復原された竪穴住居に入ると風が入らず中で火を焚けば暖ったかそうですが、換気は悪く夏は過ごし難いかもしれません。縄文人は「キシキシ」と積もった雪が解けてゆく音を聞きながら、竪穴を出て爽やかな夏の家に移る日を心待ちにしていたことでしょう。そして、ついに厚く覆っていた氷が解け川面がキラキラと輝きだすと、いそいそと丸木舟を浮かべ慣れ親しんだ漁場に漕ぎ出したのです。

さて、私たちの春といえば「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録されるその時でしょう。

今はまだ、ほほにあたる風が少し冷たく感じますが、着実に春の気配が近づいているように思います。春を待つ気持ちは未来に期待する気持ちです。

縄文人が冬の竪穴の中で夏の営みの準備をしたように、私たちも世界遺産登録後の姿をしっかりと思い描こうではありませんか。

北の縄文道民会議　副代表　田岡　克介

縄文人よ　～言霊の一しずく

札幌大学　名誉教授
縄文芸術家集団　ジャーム　代表　原子　修

戦争をしなかった縄文人

縄文人は戦争を避けたとよく言われる。

環境考古学者の安田喜憲氏は力説する。

「縄文時代の人々は狩猟・漁撈・採集活動と堅果類半栽培を生業の基本とし、森と海の資源を極限にまで循環的に利用する技術を有し、平等主義に立脚し、戦争を回避する社会制度を維持し、土器作りや芸術活動に異常なほどのエネルギーをかたむけ…（中略）…しかも、こうした生活が一万年以上にわたって北海道から沖縄に至る広い範囲で繰り広げられたのである。」「縄文文明は自然への畏敬の念をもち、自然と共存し、自然と循環的に生きるやさしい文明であった。同時に、それは、人にもやさしい文明であった。自然を信頼し、信じることができる人々は、同じように他人をも信頼し、信じることができた。したがって、縄文時代は集団で人殺しをすることのない戦争のない平和な時代であった。」

以上は、安田喜憲著『稲作漁撈文明』中の一文だが、２０１６年３月英国の科学雑誌『Ｂｉｏｌｏｇｙ　Ｌｅｔｔｅｒｓ』に発表された科学哲学者　中尾央氏（山口大助教授）と認知考古学者　松本直子氏（岡山大教授）等のチームの研究は、「縄文時代には大規模な戦争がなかった。」という安田喜憲説を裏付ける貴重なものとなった。

松本教授は、２０１６年１０月１７日付け北海道新聞の文化欄に寄せた一文の中で、研究の成果を「約一万年に及ぶ縄文時代の受傷人骨データを網羅的・体系的」に収集し、暴力による死亡率を初めて数量的に算出」した結果、死亡率は１．８％で「一万年にわたるまとまった地域のデータにおいて、戦争の証拠が確認できなかった」としている。

では、なぜ、縄文時代には戦争はなかったのか。

確かに、ユーラシア大陸を戦乱常襲地帯へと引きずり込んでいた農耕文明と金属器文明を一万年以上にわたって受け入れなかった縄文人達の哲学の深遠さや漁撈・狩猟・採集に適した地勢的な恩恵もあったであろうが、それらに加えて、出自の異なる人々同士の多様性受容力に富んだ気風なども少なからざる影響力をもっていたであろうことは容易に推測できよう。

さらに、最も致命的な要因として考えられるのが、縄文集落における生活共同体としての極めて高次な連帯機構の存在とその中枢を占める教育機能の実行性に富んだ実在であろう。旧石器時代の遊動生活期を脱し、土器の活用・弓矢の利用・イヌとの共存などを契機に始まった竪穴住居による定住生活は、食糧事情の安定化と同時に、小林達雄氏の指摘する「新たな社会的機能」（『縄文人の世界』小林達雄）をもたらしたが、その根元は「一人はみんなのために、みんなは一人のために、どう生きればいいか」という最高次の人倫課題への挑戦であったのではないか。

「それぞれの竪穴住居は、自らの主体性を確保する一方で、公共的な中央広場を囲むという一定の形式を維持することで、いわゆる社会的な契約を結ぶ」、「竪穴住居が円形に展開するこの様子は、あたかも手をつないで環を作るという、縄文人の決意と心を象徴しているように思われる。こうしたムラの設計を私は『縄文モデルムラ』と呼んでいる。」、「加えて、広場で執り行われる日常的な共同の作業、並びにさまざまな祭りの行事を通じて、つまり共通の空間で過ごすという行為から、全員の心の中に共通の意識あるいは信念、ひいては、世界観がおのずから熟成されていくのは、しごく当然の理である。」と、小林達雄氏が同著の中で推測する〈縄文モデル村〉の広場での全員参加による徹底的な熟議と、そこから生まれた掟の全員による厳しい循守こそが「一人はみんなのために、みんなは一人のために、どう生きればいいか」という縄文哲学の実践であり、「殺すなかれ、殺されるなかれ、殺させるなかれ」という掟の共有による、一万年間不戦の実現ではなかったのか。

縄文世界を構成する最小単位として、「向こう三軒両隣り」的な小規模な生活共同体が人倫的に機能し、そこでの「生きる知恵・暮らしの心」がいつの間にか二ホン列島全体に受け入れられていった縄文世界の奇蹟こそは、２１世紀人類の指標とすべきものなのだ。

縄文世界の奇蹟を支えた〈教育〉

一万数千年に及ぶ〈戦争のない時代〉を保持した縄文人の偉業は、それを支えた縄文世界の〈教育〉の成果でもあろう。

本来、縄文人は戦争をしない人々なのだという考えは通用しない。

元々、人間の脳の機能は三層構造を持ち、深層には、自己保全本能を司る〈爬虫類脳〉があって、攻撃性・暴力性・破壊性を持ち、中層には、情感や情動を司る〈哺乳類脳〉があって、親和性・心情性・愛憎性をもち、表層には、理性や悟性を司る〈新皮質〉があって、知識性・英知性を持つと言われる。

古今東西のほとんどの人は、〈新皮質〉の高次な働きによって、〈爬虫類脳〉的な暴力を抑制し、〈哺乳類脳〉的な情愛を保全し、相互依存の精神を醸成し、平和裡に人生を全うしようとする。

生来、己の内部に潜む〈爬虫類脳〉性を抑制するこの機能を〈教育〉と呼ぶならば、縄文人こそは、人類史上、最も卓越した〈教育〉によって、ほぼ全ての生活者を〈暴力と我欲の抑制者〉たらしめることに成功した希有の人々と言えよう。

縄文人のこの成功の一番大きな条件は、まず、〈教育の場〉を〈生活共同体〉としての〈向う三軒両隣〉的な小集落に限定したことにある。

円形状に設けられた竪穴住居群に住む人々は、ほぼ全員、中央の広場での座学の円陣に参加し、生活全般にわたる古来から伝承されてきた〈生活の知恵〉や〈どう生きるか〉という〈哲学〉を学び、長老や識者の教えに耳傾け、重要な部分はしっかり記憶のページに刻み込んだであろう。

せいぜい、数人から数十人程度の群れによる、この〈小集団方式〉の〈教育の場〉こそは、フランスの社会学者ミシェル・マフェゾリの言う「無限定な群衆、自己同一性を持たない民衆、あるいは、局地的で小さな実体が星雲状に集まったものとしての小集団」であり、「村落共同体は、連帯主義の上に築かれるある種の文明を準備する」ものとなる。

全員参加による全員合議の場は、〈小集団方式〉によって初めて実現するのだ。

人に〈価値的変容〉を促し、〈成熟した人格〉への道を歩ませる〈すぐれた教育〉の第二の条件は、〈教育目標〉をどこに置くかである。それについての「エミール」中のルソーの言葉を想起しよう。

「この目標とは何か？自然の目標と全く同じ目標である。」

すでに、「自然人は、彼自身がそのまますべてである。」と説くルソーの思想は、そのまま、〈自然の理〉に従って生きよ、と説く〈縄文人の先達〉達のそれと一致する。

自然によって預けられた一人ひとりの命を尊び、お互いの〈幸福感〉を大切にし合う暮らしを保証するような世の中を守りぬくためには、〈支配せず、支配されず〉という〈自由・平等・博愛〉の社会が不可欠であり、その本義がそのまま〈縄文哲学〉として教育内容に取り込まれ、一万数千年不戦の栄光を導いたのが、第三の条件であろう。

「もし、現代が政治に取り憑かれたとすれば、ポストモダンは小集団によって取り憑かれるということになるかもしれない。」というマフェゾリの予察は、ルソーの次の言葉の裏返しともとれる。

「都会は人類にとって魔の淵とでもいうべきものである。数世代もそこに住むその種族は、滅亡するか堕落する。だから、更正させることが必要だ。ところが、その場合、更正をもたらすのは、いつも田舎である。」

「人類にとってはるかに自然な田舎の生活」というルソーの言葉やマフェゾリに対する訳者　古田幸男　氏のあとがき中の「小集団の中に帰属して、日常的に同一の感情と体験を共にし、同一の価値観を共有することが重要なのである。これが、「共に＝在ること ê tre-ensemble」の意味である。」にみられる現代人類の陥っている〈人工人類的錯誤〉の陥穽の巨大さを思うにつけ、〈未来から縄文を取り戻す〉ことの至難さを思わずにはいられない。